

新たな仕組み

～農地中間管理機構～

農地中間管理機構とは

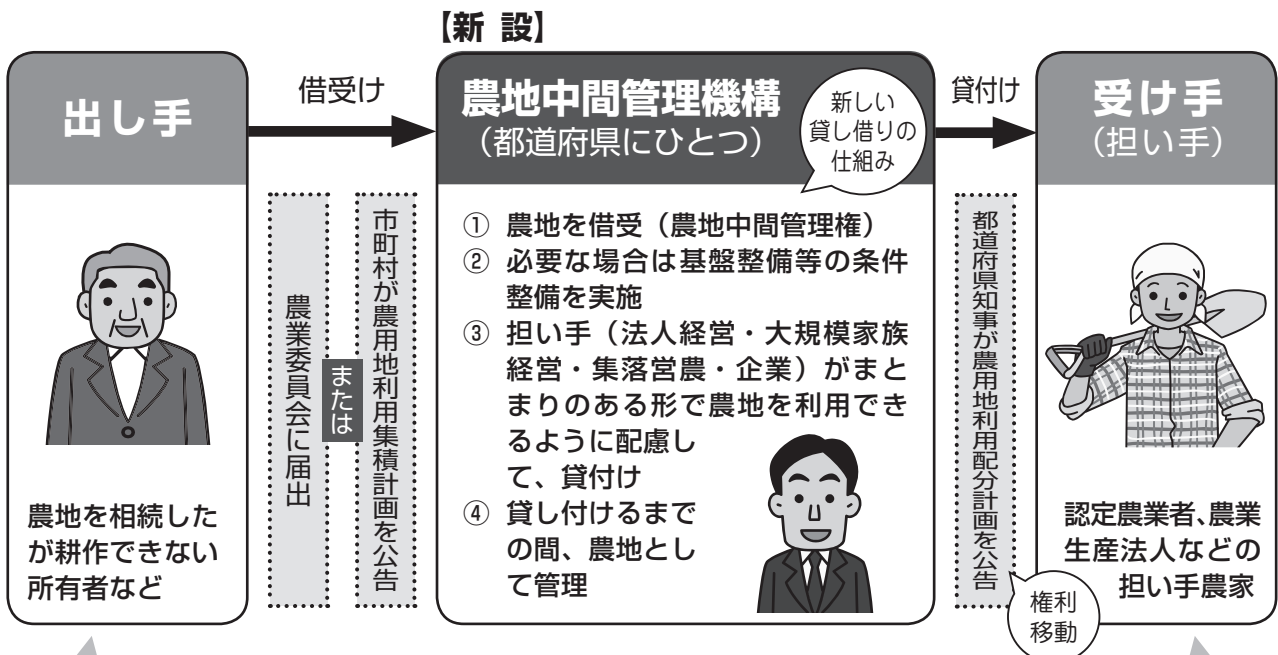
平成 26 年度から、分散した農地の集約や、耕作放棄地の有効活用などを促す目的で、新たな制度が導入されます。各都道府県に新設される「農地中間管理機構」を通じて、農地の貸し手と農地の借り手を結び付け、賃貸借を基本にして担い手農業者に農地の集約を進めようとするものです。

農地中間管理事業の内容

機構は①耕作者がいない農地の所有者から農地を借り受ける②経営規模の拡大を目指す農業者に対し、農地をまとめて貸し付ける③借り受けから貸し付けまでの間、農地を維持・管理する④必要に応じて、農地の基盤整備を実施するなどの業務を担い、いわば「農地の中間的受け皿」として機能します。

さらに利用権の再配分を繰り返します。最終的に農地の所有と利用が完全に分離され、多数の地主の農地を少数の耕作者がまとまった形で利用することをイメージしています。

機構は、農用地利用配分計画を作成し、それを知事が許可し公表することで農地の権利移動が行われます。したがって、従来の農地法による農業委員会の許可は不要となりますが、農地利用配分計画を作成する段階で市町村と農業委員会が連携し、協力することになります。



- ・ 公的な機構なら安心して貸せるぞ。
- ・ 地域農業がより良くなるよう「人・農地プラン」の話し合いを通じてみんなで機構に預けよう。
- ・ 親父が農業を止めても田舎に帰るつもりはないから、耕作放棄地になる前に機構に借りてもらおう。

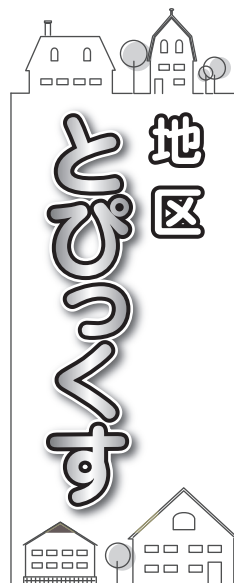
- ・ 基盤整備された農地がまとめて借りられた。機構とだけ交渉すればいいから楽だ。
- ・ 地域外から参入したけど、利用しやすい農地がまとめて借りられた。

〔 将来の地域での役割や実績を踏まえて 公平・適正に選ばれます。 〕



鶴岡 下川
本間 康行さん(37才)

将来を見据えて
設備投資を



早くから、複合経営が確立されている、西郷地区に生まれ、現在両親とともに専業農家として、様々な品目にチャレンジしながら、いつも楽しんで農業をしている就農7年目の本間康行さんにスポットを当てました。

経営形態について

現在の経営は、水稲5.6ヘクタール(内つや姫1.2ヘクタール)の他、ハウス1,400坪での花卉栽培(アルストロメリア、トルコキキョウ、ランタンキュラス、フリージア、アスター)やハウスメロン、白かぶ等を組み合わせ、通年を通しての経営を計画的に行っています。

鶴岡の西郷地区は、メロンの作付けが大変盛んな地域ですが、康行さんは、あえて親子3人の労力でできる面積に抑えながら、裏作の品目をうまく組み合わせ安定的に収入を得ています。今は、白かぶの収穫が終了し、冬場に順次採花可能なアルストロメリアを出荷しています。今後は、ランタンキュラスとフリージアが春先の出荷を控えています。また、並行して初夏採りのトルコキキョウの定植苗を準備しているところです。

多くの仲間とともに

康行さんは、JA鶴岡花卉振興部会で球根専門部長として多くの仲間とともに活躍しています。部のあり方を常に考え、また、栽培においては指導員として中心的な役割を担っています。両親がこれまで培ってきたものを大事にし、優れた経営感覚と栽培技術を兼ね備えた青年です。



ランタンキュラスの収穫

今、力を入れていること

アルストロメリアの栽培で最もネックになっているのが光熱費の問題です。昨年度、経費の節減対策としてヒートポンプを導入したことで、光熱費が大幅に削減され、また、温度設定をすることで、出荷に合わせた調整が可能となりました。

地域の現状

この地域においても、後継者不足は深刻な問題となっていますが、最近になって同級生がUターンし、農業に従事するというケースも出てきています。農地はそれぞれの農家が何とか維持していますが、作付面積の減少は否めません。

先人が培ってきた地域の主力作目を大事にし、市場評価を得ながら消費拡大を図っていきます。そのためにも、「四季を通じた農産物の生産販売と、労力の配分をうまく計画することが大事」と目を輝かせながら康行さんは話してくれました。

(取材 小笠原道明委員)



導入したヒートポンプ